



Title	日系アメリカ人4世のエスニック・アイデンティティ : Ethnic Identity Questionnaire の結果を中心に
Author(s)	中橋, 真穂
Citation	大阪大学言語文化学. 2016, 25, p. 31-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日系アメリカ人4世のエスニック・アイデンティティ

—Ethnic Identity Questionnaire の結果を中心に—*

中橋 真穂**

キーワード：the fourth generation Japanese-Americans, ethnic identity, EIQ

More than 100 years have passed since Japanese first moved to the United States. Nowadays, Japanese-Americans have gradually assimilated into American mainstream culture after the change of generations and have created ties with other Asian-Americans, which is said to have created more of an overall Asian-American awareness (Lucas 2004). In these situations, there are some Japanese-Americans who are interested in the Japanese language and culture as a means of "looking for their roots". Taking this point into consideration, the following research is focused on the ethnic identities of fourth generation Japanese-Americans.

In this study I conducted EIQ, "The Ethnic Identity Questionnaire" invented by Masuda (1970), on fourth-generation Japanese-Americans and compared this with the data of second and third-generation Japanese-Americans obtained by Ebuchi (2002). I also conducted interviews of two fourth-generation Japanese-Americans who study Japanese language at a university in California.

From my research, I have concluded that the fourth-generation Japanese-Americans tend to be more Americanized than previous generations in their ideas and behavior. On the other hand, they are more intrigued by Japanese cultural aspects and have an active interest in partaking in them. In addition to this, they tend to respect diversity and individual freedom of choices. I have also discussed the complex situation for young fourth-generation Japanese-Americans in regards to their conflicting Japanese and American identities, which is a subject that has previously had relatively little research. My research was conducted through EIQ and from the point of view of the interviewees, and will therefore help to give a deeper understanding of the younger generation of Japanese-Americans.

* Ethnic Identities of Forth Generation Japanese-Americans
Mainly from the Results by EIQ (NAKAHASHI Maho)

** 大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター

1 はじめに

今から約130年前の1880年頃、10年間で約3万人の日本人が官約労働移民としてアメリカへと渡った。日系アメリカ人と呼ばれる彼らは、過酷な労働環境、第2次世界大戦時の強制収容所、差別など困難な状況下で、多くはアメリカ社会への同化により社会進出を図った。結果、昨今では「成功したマイノリティ」と称されることが多い（森茂1999）。一方で日本語や日本文化の世代間の継承は盛んではなく、アメリカ化¹が進んでいるといわれている。さらに、「自分は日系である」と回答した約130万人中約35%は混血と回答（U.S. Bureau of Census 2010）、特にアジア系との連帯感が強まるなど、日系アメリカ人のアジア系アメリカ人化も指摘されている（ルークス 2004）。そういったなか、比較的若い世代の日系アメリカ人の間で、大学などでの日本語学習や、日系人サークル所属を通してルーツを探究する者もいる。

様々なエスニック・グループが存在するアメリカにおいても、強制収容所やその後の地位確立など、ユニークな歴史を持つ日系アメリカ人に関する研究は、今日に至るまで数多く行われてきた（例えば竹沢1994、飯野2000）。一方で、これらの多くが1～3世に関するものであり、4世以降の研究は比較的まだ少ない。日系人は世代によって特徴が大きく異なると指摘されている（竹沢1994）ように、1世と本稿で取り上げる現在20歳前後の4世ではエスニック・アイデンティティ、言語、文化など様々な点で異なる。また、同化や外婚²などにより、各集団の持つ伝統的な文化が必ずしも次世代に受け継がれなくなっているアメリカの現状を考えると、各集団の価値観や行動特性を学ぶ意義は大きい（森茂1999）。さらに、従来の研究は日系アメリカ人に対する差別、排斥、補償運動など歴史的な文脈での振り返りに焦点をあてたものが多く見られる一方で、現在の社会的文脈の中で他のエスニック・グループや個人との相互関係、自己認識、属するコミュニティの複数性などを論じる研究が比較的少なかった。

そこで本稿では、若い世代である日系アメリカ人4世のエスニック・アイデンティティに注目する。日系アメリカ人研究ではしばしば重要な論点となる第2次世界大戦や強制収容所を、自分自身やその親の世代も経験しておらず、日系人の社会的地位が既に確立された環境で育った4世代にとって、日系人であるということはどういうことなのか。また、その意識や行動様式、習慣や文化などはどのようなものであろうか。これらを明らかにすることを目的に、本稿は、カリフォルニア州のS大学に通う日系アメリカ人4世に対してアンケート調査（EIQ“Ethnic Identity Questionnaire”）とインタビュー調査

¹ 本稿では、アメリカ化とはアメリカ主流文化への同化を指し、その中でもアジア系グループに帰属意識を持つことをアジア系アメリカ人化とする。また、それらは必ずしも固定されたものではなく、個人の中でも常に変化するものと捉える。

² 日系以外のエスニック集団に属する人との結婚（飯野2000）。

を実施し、4世の特徴や世代間のエスニック・アイデンティティの変容や行動様式の変化について考察した。これら2つの調査を実施することで、数値に基づく客観的視点と4世の語りに基づく主観的視点から、より信頼性・妥当性を高め多角的に検討する。そして、まだ比較的研究や報告の少ない4世の実態を明らかにし、理解を深める。

2 研究の枠組み

2.1 先行研究

数多く実施されてきた日系アメリカ人研究の中でも本稿では、Masuda (1970)、Connor (1977)、江淵 (2002) らが実施した、EIQ“Ethnic Identity Questionnaire”を取り上げる。EIQは、日系人のアメリカ化の度合いを量的に把握する手段として社会学者Masuda (1970) によって開発された。質問項目³は、(1) 伝統的な日本人的人格特性・行動特性・価値観と見なされるもの、(2) アメリカ人的人格特性・行動特性・価値観と見なされるものの2つを支柱にした50項目で成り立っており、これらの項目に「5：大いに賛成」「4：賛成」「3：中立」「2：反対」「1：大いに反対」の中から選択してもらう(江淵 2002)。

Masuda (1970)、Connor (1977) は1～3世に対して、江淵 (2002) は2世 (10名)、3世 (26名) に対してこの調査を実施した。その結果、1、2世はアメリカ社会において差別や不平等さを感じていたこと、特に2世はアメリカ化の意思を強く持っていたこと、世代を追うごとに行動様式や意識にアメリカ化が見られること、一方で、日本文化はある程度継承されてきたことなどを明らかにした。

江淵 (2002) の調査では母体数が少なく、Masuda、Connor の調査と地域及び件数も異なる点が指摘されるが、世代ごとのアメリカ化の度合いや傾向を数値により客観的に捉えられる点でこの研究方法は興味深く、有効であるといえる。

1970年にMasudaが実施してから40年以上が経過している現在、一概に各項目がアメリカ人的／日本人的といった2次的な位置づけに該当することは限らないことに留意し、本稿はインタビュー調査で補足的に立証しながら調査を進めた。

なお、本題に入る前にエスニック・アイデンティティの概念について触れたい。デヴォス (1975) は、エスニック・アイデンティティとは、自集団の文化の何らかの側面を自己の判断によってその文化固有のものとし、それを共有する集団に対し一体感を持って他集団から区別する感情としている。江淵 (2002) はこれを、「主観的自己規定」とし、成立要件を①アイデンティフィケーション (一体化) の対象となる集団が存在すること、

³ 表2 EIQによるエスニック・アイデンティティ参照。

② その集団の成員は、肉体的、文化的、あるいは社会的なある種の特徴を共有しており、自分もまたそれ（ら）を所持していることでその一員であるとの認識を得ていること、
 ③ そうした「同類意識」によって、その集団に対して一体感を持ち集団の一員とみられることに喜びや誇りを感じることに、の3点の要素からなっているとしている。さらに江淵は、「エスニシティのオプション的性格」について、特定の民族集団の一員としての資格「成員権」は、出生による帰属的地位（ascription）によって自動的に個人に属する性格のものであるとしている。そして、その一方で個人がその集団に対して「帰属意識」を抱くかどうかは別の問題であって、それは自集団と他集団の区別が個人の相互作用の上で必要とされる状況があってはじめて生じるものであり、出自によって自動的に保証されるわけではないとしている。後に述べるが、本研究の調査協力者である日系アメリカ人の中でも、エスニック・アイデンティティの意識が比較的強い人、そうでない人と多様である。これが「エスニシティのオプション的性格」といえよう。これらを踏まえ本研究では、エスニック・アイデンティティを、歴史や身体的特徴、文化などにおいて何らかの共通点を有する自集団への共有感と一体感を持った、自己認識と定義する。

2.2 調査の実施

EIQ 調査は2011年11月、カリフォルニア州サンフランシスコ近郊にあるS大学に通う日系アメリカ人4世⁴35名（18歳～22歳、男19名、女16名）に対し英語で実施した。回答者の大半がS大学の日系人サークルに所属する者やその友人であるため、比較的エスニック・アイデンティティの強い傾向があると予想できる。よって、この結果を一概に一般化することは出来ない点も踏まえたうえで分析を進める。

またインタビューは、S大学で日本語クラスを受講した経験のある4世2名（表1参照）を対象に2009年3、8、10月の合計3回、英語で半構造化インタビューを実施した。2名ともカリフォルニア州で生まれ育ち、（本人が知る限り）混血ではない日系3世の両親を持つ。3世である両親は日本語を話さず、4世である本人達も少し大学で勉強した程度である。なお、インタビュー結果の「」内は協力者の英語での発言を和訳したものである。

⁴ ここでの4世とは、解答欄に「両親の世代」「自分の世代」「混血の有無」を問う項目を設け「両親が3世」かつ「混血でない」「自分を4世」と認識する者に限った。

表1 調査協力者のプロフィール

名前（仮名）	エスニシティ	ナショナリティ	年齢（当時）／性別
クリス	日系	アメリカ	23 / 男
エイミー	日系	アメリカ	20 / 女

3 結果と考察

調査結果から、本調査の協力者である4世の人格・行動特性や、2、3世との違いが浮き彫りとなった。以下、質問項目と本調査結果を1980年に実施されたサンノゼに住む2、3世の結果（江淵 2002）とともに表2に示す。なお、江淵（2002）を参考に、平均得点範囲が3.41～5.0を「肯定（P）」、2.60以下を「否定（N）」、その間を「中立（n）」とし、英語で実施した質問項目を翻訳して提示する。表中に、伝統的な日本人の意識・行動・価値観についての項目「日本文化志向」を“J”、典型的なアメリカ人の意識・行動・価値観についての項目「アメリカ文化志向」を“A”と表示する。ただし、この記号は実際の質問紙には書かれていない。肯定的反応を示した項目、否定的反応を示した項目の順に分析をし、世代間を比較した後、4世の特徴についてまとめる。

表2 EIQ によるエスニック・アイデンティティ

項目		世代別（標本数）	サンノゼ 2世 (N=10)	サンノゼ 3世 (N=26)	S大学 4世 (N=35)
J	1	良い子とは素直な子のことである。	n(3.32)	n(3.04)	P(3.54)
A	2	家族に対する義務よりも個人のしたい事を優先させても差し支えない。	N(2.47)	n(2.77)	n(2.90)
J	3	周りに白人がいるような時、日系人仲間内で言い争うのはよくない。	n(2.62)	N(1.77)	N(2.09)
J	4	私は日本料理が格別好きである。	P(3.69)	P(4.35)	P(4.72)
J	5	日系の若者が、他のアメリカの若者が今日陥っている多くの非行に陥らずにすんでいるのは、立派な日本の伝統のおかげである。	P(3.81)	n(2.92)	N(2.18)
A	6	日系人に生まれついたのは不運である。	N(1.87)	N(1.27)	N(1.09)
J	7	日系人が全然いない地域よりも、少しでも日系人のいる所に住んだ方が快適であろう。	P(3.75)	P(3.77)	P(3.72)
A	8	愛情を感じたら、率直に気持ちを表明する。	n(2.91)	P(3.65)	P(3.72)
J	9	親の老後の面倒を見るのは長男の義務である。	n(2.71)	N(2.50)	n(2.81)
J	10	白人から差別されるかもしれないという考えもなしに新しい場所に移り住む日系人はバカだ。	P(3.93)	P(3.96)	n(2.63)

J	11	日系人がアメリカ化するのには差し支えないが少しは日本文化を持ち続けるべきだ。	n(3.37)	P(4.19)	P(4.00)
A	12	妻のキャリアは夫のキャリアと全く同様に大切である。	P(3.62)	P(4.27)	P(4.63)
J	13	日系人は、他のアメリカ人が享受している機会の多くを、その祖先の故に奪われている。	N(2.25)	n(3.31)	N(2.00)
A	14	子どもが時には親の決めたことに意義を唱えることは差し支えない。	P(4.31)	P(4.15)	P(4.09)
J	15	日系人コミュニティの人間関係は一般に、外に比べ温かく快適である。	P(3.50)	P(3.50)	n(3.09)
A	16	私は（日系人だからと言って）他のアメリカ人とは違って日本政府の方針に従おうとするような気持ちをもつというようなことはない。	P(3.69)	P(3.73)	P(3.45)
A	17	日系人にとり最善の事はずっと白人と交わり完全にアメリカ人として同化することだ。	N(2.39)	N(1.73)	N(2.0)
J	18	人は知らずに私の心を傷つけるというようなことがあるから、私は事によっては自分の本当の気持ちをかくそうとすることがある。	n(2.85)	P(3.69)	n(3.0)
J	19	日本語ができないというのは日系人として恥ずかしいことだ。	n(3.25)	n(3.19)	N(2.27)
J	20	日本民族は自然に対し抜群の洗練された感覚と深い感情を持っている。	P(3.81)	P(3.50)	n(3.18)
A	21	白人が私を平等に受け入れなかったら腹が立つだろう。	P(4.25)	P(4.15)	P(4.27)
J	22	日系人が、努力次第では主に白人から成る組織のリーダーにだってなれるのではなどと望みをもつことは、白人は決してそんなことはさせないから、全くの無駄というものだ。	N(1.96)	N(2.15)	N(2.18)
A	23	私は日本に対して格別つよい愛着をもっているというわけではない。	P(3.71)	n(3.15)	n(2.63)
J	24	私は他人に対して気を遣いすぎる方である。	n(3.21)	n(2.69)	N(2.54)
A	25	日系アメリカ人にとって、日本文化遺産をわが子が失わないようにさせることは、必ずしも親のつとめであるというわけではない。	n(2.62)	N(2.38)	n(2.81)
J	26	兄の決めたことは、弟が決めたことよりも尊重されるべきである。	N(1.53)	N(1.84)	N(2.09)
J	27	私は、白人は日系人に比べると付き合いにくいと思う。	N(1.75)	N(2.32)	n(3.36)

A	28	日本人は他の人種に比べて優れているという事もなければ劣っているという事もない。	P(3.78)	P(3.67)	P(4.45)
A	29	私は常に自分はまずアメリカ人であり次に日系人であると思っている。	P(4.15)	n(2.63)	n(3.0)
J	30	小さい頃はわからないが、大きくなると日本語学校の有難味がわかるようになる。	P(3.43)	P(3.52)	P(3.45)
A	31	アメリカでの生活は日系人にとり全く理想的である。	P(3.71)	N(2.52)	P(3.45)
J	32	助けがいるときは、まず親戚の者を頼るのが一番良い。	P(4.07)	n(3.00)	n(3.09)
J	33	日系人とだけデートした方が良い。	n(3.10)	N(2.16)	N(1.63)
A	34	子どもと友達のように過ごす親でも親としての威厳を失わないという異は可能である。	P(3.85)	P(4.25)	P(3.90)
J	35	一度日系人に生まれついたからには死ぬまで日系人である。	n(2.85)	P(4.24)	n(2.81)
A	36	伝統ある日系人諸団体の助けを借りなくても、日系人と白人とはうまくやっていける。	P(3.85)	P(3.50)	P(3.81)
-	37	日系人が日本文化についてより多くを知ることは素晴らしいことではあるが、しかしどうしても必要というわけではない。	P(3.64)	n(3.08)	P(4.09)
A	38	日系人だけのコミュニティというものがアメリカになくてすむものならその方が良い。	N(2.43)	N(1.68)	N(2.0)
J	39	日本は偉大な芸術的遺産を持ち、世界文明に重要な貢献をしてきた。	P(4.60)	P(4.28)	P(4.27)
J	40	日本文化に対して非好意的な態度をとる日系人は間違っている。	P(3.55)	P(3.96)	n(2.90)
J	41	恩を返さぬ人間は立派とは言えぬと思う。	P(3.71)	P(3.56)	P(3.54)
J	42	差別を受けてから当惑するよりも、全く歓迎されないような所は初めから避けるのが賢明なやり方である。	P(3.75)	N(2.27)	N(2.45)
A	43	私は普通、色々な人種の入り混じったグループの話し合いに加わる。	P(3.93)	P(3.81)	P(4.18)
A	44	日本の習慣、伝統、態度の多くは、もはや今日の世界の諸問題に立ち向かうには適切ではない。	N(2.14)	n(2.75)	N(2.27)
J	45	日本映画を見るのは楽しい。	n(3.28)	P(3.88)	P(4.0)
A	46	教師とか警官とか、権威をもつおとなに時には「刃向う」こともあるというのは成長過程では自然である。	N(2.21)	P(3.46)	n(2.63)

J	47	余りに頻繁に質問をしすぎる人間は、全体の進行の邪魔である。	N(2.19)	N(2.04)	N(2.54)
J	48	日系人だけの教会に行く方が好きである。	n(2.62)	n(3.04)	n(3.27)
J	49	個人が信用を失えば、それは必ず家族全体に及ぶ。	P(4.19)	n(3.12)	N(2.27)
J	50	日系人と白人との結婚は奨励されるべきではない。	n(2.62)	N(2.25)	N(1.81)

3.1 肯定的反応の分析

「日本文化志向」の質問項目で肯定的反応を示したのは31問中8問（1、4、7、11、30、39、41、45）、「アメリカ文化志向」の質問項目で肯定的反応を示したのは18問中10問（8、12、14、16、21、28、31、34、36、43）だった。「日本文化志向」を示す8項目からその内容を見る。

(1) 日本文化志向

肯定的反応を示した「日本文化志向」の8項目は、「伝統的な日本人の人格・行動特性・価値観と見なされるもの」「日本文化継承への関心」の2つに分類できる。

「日本人の人格的・行動的特性・価値観」は、1（良い子とは素直な子）、7（日系人のいるところに住んだ方が快適）、41（恩を返さないのは立派な人間ではない）の3つに対して肯定的反応を示した。「日本文化継承への関心」は、4（日本食）、11（日本文化保持の必要性）、30（日本語）、39（文化遺産の偉大さ）、45（日本映画）の5つに対して肯定的反応を示した。

8問中5問が「日本文化」に関する項目であることから、日本文化がある程度継承されている、もしくは継承に肯定的である。言い換えれば、その他の日本人的とされる人格・行動に対しては、中立または否定を示しているということになる。

(2) アメリカ文化志向

肯定的反応を示した「アメリカ文化志向」の項目は、(1)で示した項目と対照的である。

「アメリカ人的人格・行動・価値観」において8（愛情を素直に表現）、12（妻と夫のキャリアは同等に大切）、14（子が親の決断に意義を唱えてもよい）、21（白人が私を平等に受け入れなければ腹が立つ）、28（日本人は他の人種に比べ優劣なし）、34（子と友だちのような間柄の親でも威厳を失わないことは可能）、36（日系人諸団体の助けなしに日系人と白人はうまくやれる）、43（人種の入り混じったグループの話し合いに加わる）であることから、男女のキャリア、親子関係、他のグループとの関係など、平等主義に

基づいた典型的なアメリカ人的な意識であることが分かる。また、16（日本政府の方針に従う気持ちはない）、31（アメリカの生活は日系人にとり理想的）から、現状のアメリカの生活への満足感が認められる。

3.2 否定的反応の分析

「日本文化志向」で否定的反応を示したのは31問中12問（3、5、13、19、22、24、26、33、42、47、49、50）、「アメリカ文化志向」では18問中4問（6、17、38、44）である。

(1) 日本文化志向

否定的反応を示した「日本文化志向」の項目は「伝統的な日本人の人格・行動・価値観」と「(特に白人との)人間関係に関する態度」の2つに分類することができる。

「日本人の人格・行動・価値観」は、5（日系の若者に非行がないのは日本的伝統のお蔭）、19（日本語ができないのは恥）、24（他人に対して気を遣いすぎる）、26（兄の決断を尊重）、47（頻繁な質問は全体の進行の邪魔）、49（個人が信用を失えば家族全体に及ぶ）といった伝統的な日本人の行動や価値観の大半を否定的に捉えている。

「(主に白人との)人間関係に関する態度」においては、3（白人がいる時、日系人仲間内での言い争いはよくない）、13（日系人は他のアメリカ人が享受している機会の多くをその祖先の故に奪われている）、22（非白人がリーダーになるという期待は無駄）、33（日系人とだけデートした方がよい）、42（差別をされるような状況は初めから避けるべき）、50（日系人と白人との結婚は奨励されるべきではない）であり、差別を受けるなどの状況や不平等な社会を否定している。

(2) アメリカ文化志向

否定的反応を示した「アメリカ文化志向」のうち「人格・行動・価値観」に関する項目は1つもなく、6（日系人に生まれたのは不運）、17（白人と交わり、完全にアメリカ人として同化すべき）、38（日系人だけのコミュニティはない方がよい）、44（日本の習慣、伝統、態度は今日の世界の諸問題に立ち向かうには不適切）といった日系人のエスニック・アイデンティティをネガティブに捉える項目に対してのみである。

3.3 世代間の違い

2、3世と比べると4世はどういった点でどのように異なるのだろうか。次は、世代間の違いに注目したい。

3世のデータ（江淵 2002）と異なる項目（50問中19問）を、内容別に「人格・行動・価値観」「平等な社会への意識」「日本文化継承・日系コミュニティ」の3つのカテゴリーに分類、特徴的な項目を抜粋し、インタビュー結果とあわせて考察する。

3.3.1 人格・行動・価値観

はじめに、日系人の人格や行動、価値観について、2、3世と異なる結果が出た項目を示す。

5（日系の若者に非行がないのは日本の伝統のおかげ）、18（人を傷つけぬよう本心を隠す）、24（他人に気を使う）、49（個人が信用を失えば家族全体に及ぶ）といった日本人的な人格・行動・価値観において、2、3世は「中立」または「肯定」なのに対し、4世は「中立」または「否定」を示している。また、20（自然に対する洗練された感覚と深い感情）は、2、3世は「肯定」だったのに対し、4世は「中立」であることから、人格、行動、感覚等、2、3世に比べより、アメリカ化が進んでいるといえる。

クリスへのインタビューでも、はじめて日本に行った際に「アメリカ人的な振る舞いをしたら皆に見られるため、日本人的に謹んで行動した。でもそれがどのようなものか分からず、とても疲れた。」と、日本人である外見とアメリカ人的な行動との差に終止戸惑った様子が語られた（インタビュー、以下“IN”と示す：2009年3月）。

3.3.2 平等な社会に対する意識

次に、日系人のアメリカ社会での位置や白人との関係を問う「平等な社会への意識」について、3世と異なる結果が出た項目を示す。

10（白人からの差別を受けるかもしれない）で、3世は「肯定」、4世は「中立」、13（日系であるがゆえに機会が奪われる）について3世は「中立」、4世は「否定」しており、日系人であるがために差別を受けるということは2、3世に比べて少ない（あるいは無い）といえ、より対等な意識を持っている。実際、インタビュー協力者の2名は医師、弁護士を目指しており、これは31（アメリカの生活は日系人にとり理想的）で3世は「否定」、4世は「肯定」していることとも関連しているといえる。

これは結婚観にも表れている。3世までは比較的日系人同士での結婚が多かったが、33（日系人とだけデートした方がよい）、50（日系人と白人との結婚は奨励されるべきではない）を4世は強く「否定」しており、外婚への抵抗感はほとんどない。アジア系としての意識は既に3世の代に始まっているが、異なるエスニック・グループに対しより平等な意識を持つ4世にとって、その意識はより強いといえる。例えばクリスは、「友達の多くは中国系だから、日系以外と結婚する可能性が高い。（中略）それはちょっと

悲しい。一方で、(中略) 移民の歴史が長い白人が、もともとイギリス系、ドイツ系などの違いがあったのに徐々に混ざり合い、まとめて白人とされるようになったように今後、アジア系としてのつながりが強くなっていくだろう。それはいいことでもあると思う」と語っている (IN: 2009 年 8 月)。異なるエスニック・グループとの交流やアジア系アメリカ人化への肯定的な意見も見られ、エスニック・グループの枠に囚われない対等でオープンな意識が伺える。

3.3.3 日本文化継承・日系コミュニティ

インタビューでエイミーが、「私の周辺の日本文化は、私のようにアメリカナイズされたものかも」(IN: 2009 年 8 月) と捉えているように、アメリカ社会の中で変容を遂げつつも一部の日本文化は世代を超えて継承されている。一方、15 (日系コミュニティは外に比べて快適) で 2、3 世は「肯定」、4 世は「中立」であることから、2、3 世にとって快適な日系コミュニティは、4 世にとって必ずしもそうではないことが分かる。これは、4 世の回答者の大半が日系人サークルに所属しているにも関わらず出た結果である点にも注目したい。クリスも幼少期を、「意識して日本人や日系アメリカ人と行動を共にすることもなかった。」と振り返っている (IN: 2009 年 8 月)。

また、19 (日本語を話せないのは恥) で 2、3 世は「中立」、4 世は「否定」、25 (日本文化遺産継承は必ずしも親の務めではない) で 3 世は「否定」、4 世は「中立」、37 (日系人が日本文化について知ることは素晴らしいが必須ではない) で 3 世は「中立」、4 世は「肯定」、40 (日本文化に対して非好意的な態度をとる日系人は間違っている) で 3 世は「肯定」、4 世は「中立」を示したことから、4 世は文化継承に関して概して前向きではあるものの必須ではなく、個人の選択の自由を重視しているといえよう。

クリスは、「1、2 世がアメリカへの適応を試みた結果、日本文化、日本語も次第に薄れ、4 世である自分達にとって今、(中略) 何者なのか、明らかにすることが難しい時期に来ている。しかし、そういった中でアメリカ化する者もいれば日本語学習などを通して再び文化とつながろうとする者もいる」としている (IN: 2009 年 10 月)。アメリカ人化、アジア系アメリカ人化する者もいる一方、自分のルーツに興味を抱く者など多様であり、そういった個人の意思を尊重する姿勢が観察される。

4 まとめ

最後に、以上の分析から本調査の協力者である 4 世の特徴をまとめる。

第 1 に、本調査の協力者である 4 世は、3 世のデータ (江淵 2002) に比べより多くのアメリカ人的な人格・行動・価値観に関する項目に肯定的である一方で、日本的な人

格・行動・価値観に否定的であることから、行動や考え方において概してアメリカ人的な考え方や行動をとるといえる。

一方で、数値やインタビューから、僅かに日本人的な部分を持ち合わせてもいる。明石・飯野（2011）は、外見や日常の生活様式では、2、3世は他のアメリカ人と一見同じに見えるが、意識的にせよ無意識的にせよ移民が故国からアメリカへ持ち込んだ価値観や行動様式は、2、3世に受け継がれていったとしている。4世の場合も、行動や価値観に関しては主流社会へ同化しているものの、家庭内での生活、食、文化等で少なからず継承されているといえよう。

第2に、本調査協力者の4世は差別や不平等な扱いを受けた経験がないとの結果から、成長過程で少なくともなんらかの形で「日本人の血」を恥じる経験をした3世以前（竹沢 1993）と異なり、対等でオープンな意識を持ち、アメリカでの生活に満足している。これは先にも述べたように、地位の確立が大きいであろう。「大学卒以上」の率が約半分を越えるのは、戦前2世、戦後2世、3世、4世の順に高くなり、職業に関しても1世は半熟練・単純労働（農業、庭園業など）など高い教育を必要としない職業に就いていたが、教育を重視する彼らの期待を担って2世は高い教育を受け、専門職に就いている者が多く、3、4世になるとその傾向はさらに強くなるとしている（彦坂 1997）。今回のEIQ結果やインタビュー協力者の目指す職業からも分かるように、4世において3世よりさらに、平等な社会と確立された地位が観察される。

第3に、日系コミュニティが3世以前に比べ特別ではないという回答やインタビューからも、エスニック・グループを超えた幅広い交流が認められる。また、そういった中、日本文化等に対しては多くの点で肯定している点や日系としてのエスニック・アイデンティティをネガティブにとらえる項目に対し否定的である点から、アメリカ化が進む中でも日系人としての誇りを持ち、日本文化継承に前向きである。これは江淵（2002）が、3世の分析で人格や行動はアメリカ化する一方、日系人の独自性・尊厳性と日本文化の保持存続が主張されている点で一貫性があるとした部分と一致する。また、「ルーツを探る手段として日本語を勉強している（IN: 2009年8月、エイミー）」ように、日本とつながる手段、日本人的要素を補足する手段といった、日本語とエスニック・アイデンティティの密接な関係（竹沢 1994）がみられた。

この点について南川（2007）は、戦後になると日系人の間では、職業選択、婚姻、友人関係などの面で「日系」にこだわらない人的結びつきが定着するようになり、実質的な連帯という機能が減退するにつれ、逆に「日系であること」が示す意味内容が一層重要になってきたとしている。また、木下（2005）も、アメリカ化の過程において、アジア系は常に精神的にも肉体的にも自分達の言語、歴史、文化的価値観を捨てることで白

人男性の文化へ適応し、「アメリカ的生活様式」を受容したものの、それだけでは満たされないということを発見したとしている。インタビューでも、世代交代、日系アメリカ人同士のつながりの希薄化などによる日系人であることの曖昧さ、アジア系アメリカ人化を実感しつつも、ルーツを探索している様子が観察された。

これに関連して第4に、本調査の4世の特徴として多様化が挙げられる。3世までは集団としてある一定の傾向があったが、4世は日本文化継承や日系コミュニティに肯定的である一方、3.3.3で触れたように、必須ではなくあくまで個人の自由と捉えている。歴史的出来事による共通意識から、EIQは日本文化の保持とアメリカ化を1つの連続体として捉え、どちらでもない数値を示す人々を中間点と位置付ける傾向にある。しかし、本調査結果から4世は、文化継承・ルーツ探求・結婚観、さらに「混血」の増加など、あらゆる点で同世代の中でも多様化が進み、個人の中でも複数のアイデンティティを持ち、違いを尊重する傾向にあると考察される。そういった彼らに対し、日本的/アメリカ的といった2次元的な位置づけや、それを単に世代差に起因すると認識するだけでは不十分だと考える。EIQの35（一度日系人に生まれついたからには死ぬまで日系人）においても、2世の示した「中立」はアメリカ化を意味し、3世は地位確立により日系であることに意義はなく「肯定」、4世の「中立」は、インタビューにもあるように異なる集団とのより活発な交流により、時と場合により日系人、アメリカ人、アジア系アメリカ人といった世代論に囚われない多様なアイデンティティを持ち合わせているためとも捉えられるのではないだろうか。また、何かのきっかけ、例えば、日本語学習を機に日系人としてのエスニック・アイデンティティを強く意識するといったような、新たなアイデンティティの構築という可能性をも含んでいる（中橋2012）。

本調査は調査協力者が限定的であるため単純に一般化できるものではなく、地域、グループによっては異なる結果も予想できる。しかし、ごく一部ではあるが4世の傾向を明らかにできたのではないだろうか。今後の課題として、本調査を更なる分析、他グループとの比較、調査協力者の増員やインタビューの継続などにより、若い世代の日系アメリカ人のダイナミクス性に富んだ周辺環境やエスニック・アイデンティティの変化を多角的に考察、明らかにしていく。その多様さゆえ、一概に1つの世代としてまとめるには危険な世代であることを認めた上で、それでもなお「Yonsei」と名乗り、ルーツに想いを馳せる若者が存在する限り、4世以降に関する研究は今後必要であろう。

引用文献

明石紀雄、飯野正子『エスニック・アメリカ』有斐閣、1997。

Connor, John W. *Tradition and change in Three Generations of Japanese Americans*.

- Chicago: Nelson-Hall, 1977.
- De Vos, George, and Lola Romanucci-Ross. *Ethnic Identity: Cultural Continuities and Change*, Palo Alto. Mayfield Publishing Company, 1975.
- カーティス・タカダ・ルークス他『アジア系アメリカ人の多様性：連帯に向けて』日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム報告書、2004。
- 江淵一公『バイカルチュラリズムの研究：異文化適応の比較民族誌』九州大学出版会、2002。
- 彦坂佳宣「日系アメリカ人の言語的状況とエスニシティ」『立命館言語文化研究』8、pp.3-45、1997。
- 飯野正子『もう一つの日米関係史』有斐閣、2000。
- 木下昭「現代日系アメリカ人のエスニシティ：学生組織を事例として」『国際立命館言語文化研究所』16、pp.59-72、2005。
- 南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学』彩流社、2007。
- Minoru Masuda 'Ethnic Identity in Three Generations of Japanese Americans' *The Journal of Social Psychology*. Vol.81, Issue 2. 1970.
- 森茂岳雄『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店、1999。
- 中橋真穂「日系アメリカ人4世のライフストーリーー ー日本語学習とアイデンティティに着目してー」『言語文化学』21、pp.43-55、2012。
- 竹沢泰子「日系アメリカ人におけるエスニシティ再生とアメリカ化」『アメリカ研究』27、pp.171-188、1993。
- 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティー強制収容と補償運動による変遷』東京大学出版会、1994。
- U.S. Bureau of the Census, Department of Commerce, "The Asian Population", Census. 2010.